ベートーベンのピヤノ

欽生

若い米國の旅行家連中。ボーンに在るベートーベンの家を見物して。故大家の居室と云へるに導かれ、感慨交々至り。種々故人の事蹟に就て質問したるが。其中の若い女一人。突如としてベートーベンが遺愛のピヤノに對し。さも得意氣にムーンライト、ソナタの一曲を奏し初めたり。故大家が居室に。故大家が所有のピヤノもて。故大家が曲を奏す。何等の幸遇ぞ。番人の爺さんは佛頂面して終始無言なりしが。曲終へて女は番人に向ひ。「之まで隨分音樂家も來て此ピヤノを彈いて見ましたろうね」

「左樣。パデレウスキー先生(露國人、現時世界の大家)も昨年見へました」

「マー。左樣」女は稍へコめり

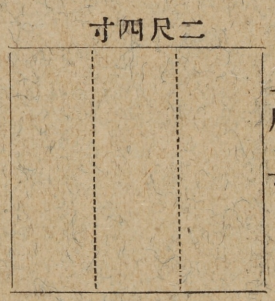
「併しね」。番人は一向お構ひなく語を續けり「他の人々が先生に此ピヤノで何にか一つと切りに所望したら。先生は頭を振つて。イヤ迚も私などの及ぶ所でないと申されましたよ。ハイ」

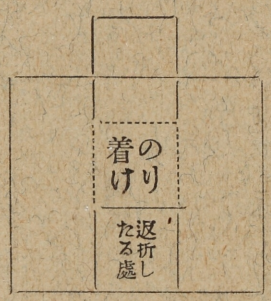
日本水彩畫會新會友
福井縣今立郡上池田村
上池田小學校　山形寛

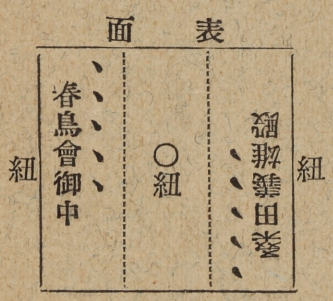
便利なる包裝

批評を求むるため送らるゝ繪畫の包裝は、會友諸君に於て種々工風を凝らされることであるが、兵庫縣の桑田氏考案の分は至極便利に出來てゐる。

上圖の如き、あまり厚くないボール紙の一方へカンレーシヤを貼り、その方を表として紙を横に三つに折る、そして內部の中央上下へ八寸に四寸位ひの厚い紙を貼つて、それを折返して中の繪の出ないやうにする、三つに折つた表面の方の一部には春鳥會宛とし、他の部は、逆さに自分の名前を書く中央と表紙の兩端とに紐を着けて置く、そして會へ繪を送る時には會宛の方を表に出し、會から畫を返す時はその反對にするので、双方共手數が省けて甚だ便利である、詳しくは圖を見て案し給へ。







* * * *